季刊

博物館だより

FUKUSHIMA MUSEUM QUARTERLY

URL http://www.general-museum.fks.ed.jp

74

秋の企画展

ふくしまの工芸

福島県立博物館

椿彫木彩漆笈部分（重要文化財　福島県立博物館蔵）

「工芸」とは何でしょうか？

困った時の『広辞苑』を引いてみると、

こうげい【工芸】①工作に関する芸術。製造に関わる技芸。②芸術的な工作物を作ること。とあります。どうやら工芸とは、芸術あるいは美術といった概念に当てはまる何かが表現されていたり、潜んでいたりする「物づくり」のことのようです。さらに、

こうげいひん【工芸品】芸術的要素を含む工作物。美術意匠と技巧によって、美感を与えると

同時に日常生活に役立つ物品を指していう。

という言葉も出てきます。私たちに美しいという思いを抱かせることと同じくらい工芸にとって重要なのは、この「日常生活に役立つ物品である」ということです。己の芸術性や個性を表現することを目的の一とした近代の工芸品を別とすれば、寧ろ日常に役立つ物品の中で芸術性や美を感じさせた物が工芸品となったと言った方が正しいかもしれません。

明治時代に西洋の美術の考え方が入ってきてから「工芸」という言葉でくくられた品は、蒔絵で装飾した神社への奉納品であったり、殿様の好みで作られた藩の御用窯の飲食器であったりというように、様々な技法でそれぞれの用途に合わせて作られた物でした。工芸をして「用の美」「生活の芸術」と表現されるのは、もっともなことなのです。

一方で、使われる美術であることが工芸の輪郭を曖昧なものにもしています。生活雑器は工芸品なのか？千利休は朝鮮で作られた雑器に己の考える美を見出し、柳宗悦は各地で作られていた生活雑器に民芸という言葉で光を当てました。使う人、見る人によって工芸品の範疇は深まったり、広がったりします。

何を美しいと思い、何に芸術を見出すのか。工芸に私たちの美的センスは試されているのかもしれません。

「ふくしまの工芸」展では、福島で作られ、使われてきた、芸術性を感じられる物をご覧頂きます。使われる物である工芸品の性格を捉えるために二つのテーマを設けました。「祈りのかたち」と「くらしの美」です。

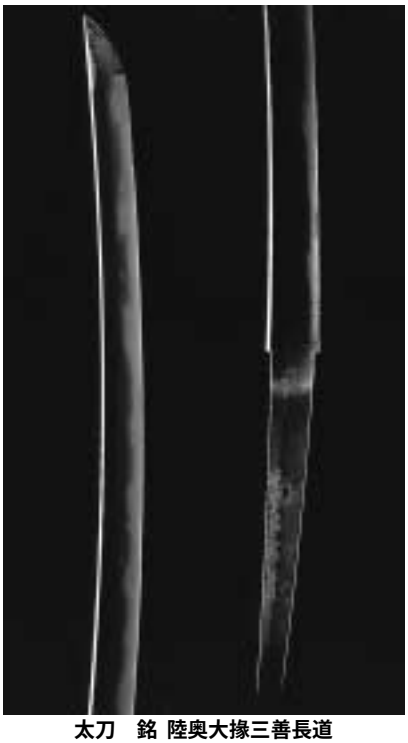
「祈りのかたち」では、寺社などで日常や儀式で用いてきた宗教具、神仏への願いがこめられた奉納品、亡くなった者への想いを託した供養品を展示します。これら祈りを宿した様々な品は、祈りの強さを反映した荘厳で精緻な工芸の優品です。

「くらしの美」では、茶の湯、能などで使われた遊芸具、身を飾るものであればこそ独自のセンスが発揮される刀の鐔や陣羽織などの装身具、そして日本の豊かな食文化の一翼を担う様々な飲食器を展示します。これら暮らしを彩る美の中には、会津金工、会津漆器、相馬駒焼など福島

秋の企画展

ふくしまの工芸

●会期　平成16年10月23日（土）～12月5日（日）



太刀　銘 陸奥大掾三善長道
（県指定重要文化財　土津神社蔵）

松に鶴蒔絵椀　池田清晃作（個人蔵）

で生まれた工芸品も含まれています。
鎌倉時代から近代までの約150点の展示品は、福島の芸術性、美的センスの歴史も教えてくれるでしょう。

最後にもう一度『広辞苑』にご登場頂きましょう。
こうげいびじゅつ【工芸美術】工芸品で、ことに美術的表出に重きをおいたもの。金工・木工・漆工・陶工・織工などの類。美術工芸。
工芸には、材料や技法によって分類される多数の工匠の技があります。金属を加工する金工、木を彫り、接ぐ木工、漆を塗り、漆で装飾する漆工、土と釉薬と炎で様々な姿を生む陶工、糸を紡ぎ、染め、織り、刺繍する織工など、工芸は日本が誇る手仕事の、優れた技の宝庫でもあるのです。作る人使う人のセンスと共に、現在では再現不可能なものもある技の数々もご覧ください。

主な展示資料

宗教具　金銅製双龍双鳥文磬（重要文化財　金剛寺蔵）
　椿彫木彩漆笈（重要文化財　示現寺蔵）
奉納品　長覆輪太刀（重要文化財　馬場都々古別神社蔵）
　金銅製蓮華唐草文華鬘（県指定重要文化財　妙見堂蔵）
　金梨子地糸巻太刀（県指定重要文化財　土津神社蔵）
供養品　刺繍涅槃図（妙国寺蔵）
　黒地紅白梅模様袈裟
　（吉良上野介夫人梅嶺院所用小袖直し　満願寺蔵）
遊芸具　会津本郷焼　灰釉茶碗（個人蔵）
　鳴子蒔絵箏（板倉神社蔵）
装身具　鉄線花葵唐草文図鐔（銘　正阿弥一光作　個人蔵）
　黄羅紗地日輪模様陣羽織（板倉神社蔵）
飲食器　色絵流水に柳図桃形鉢（仁清・初代田代清治右衛門作　個人蔵）
　大堀相馬焼　鉄銹駒絵徳利（野馬追の里原町市立博物館蔵）

相馬駒焼　色絵仏手柑図茶碗（個人蔵）

会期中の関連行事

○七絃琴演奏会「江戸の音色・唐土の音色」
日時　一一月三日（水・祝）午後二時～
奏者　飛田立史氏
会場　講堂

○博物館友の会講演会「工芸の歴史と文化」
日時　一一月二三日（火・祝）午後一時半～
講師　樋田豊次郎氏
（京都工芸繊維大学助教授）
会場　講堂

○体験講座（定員制・要申込）
「編組細工をやってみよう」
日時　一〇月二四日（日）午後一時半～
「ふくしまの手技に親しむ―型染め1」
日時　一〇月三一日（日）午後一時半～
「ふくしまの手技に親しむ―型染め2」
日時　一一月六日（土）午後一時半～
「うるしの技に挑戦―沈金」
日時　一一月二一日（日）午後一時半～
「竹のかごをつくろう」
日時　一一月二八日（日）午後一時半～

○展示解説会
日時　一〇月二三日（土）午後一時半～
　一一月二三日（火・祝）講演会終了後
　一二月五日（日）午後一時半～

■企画展《ふくしまの工芸》は平成一六年一〇月二三日（土）から一二月五日（日）まで開催しています。
■企画展観覧料　一般・大学生三〇〇円（二四〇円）高校生一七〇円（一四〇円）小・中学生一二〇円（九〇円）（　）は二〇名以上の団体の場合の料金です。一一月二日から七日は小・中学生、高校生無料。

名誉館長特別講座
「風土の文化誌」について

高橋富雄名誉館長による特別講座が、今年度は「風土の文化誌」と題し、全六回にわたり行われております。その内容は、高橋名誉館長が昨年三月まで館長講座として、昭和六一年の開館以来、月二回行ってきた金曜講座の総括・結論ともいうべきものです。

金曜講座は、多くの聴講者から好評を博し、地域社会と県立博物館との交流に大きく貢献してきました。そこには名誉館長の長年の歴史学の研究成果を、わかりやすく福島県内の史料にもとづき解説されてきたことがあげられ、また県立博物館の歴史をも物語っています。

今年度のテーマ「風土の文化誌」は、金曜講座のなかで講演されてきた福島県の歴史・文化について。その形成過程を隣接する地域の歴史と照合し、日本の歴史のなかで位置づけされるもので、二一世紀の福島県の歴史を展望するものといえます。福島県は、東北の南端に位置し、関東および北陸など中部日本の北端にも位置します。また福島県は、日本海側と太平洋側からの文化が交叉する地域として、さまざまな形で歴史が形成されてきており、わが国の歴史のなかでも、重要な位置にあります。このような歴史的背景にある福島県の歴史・文化について、次の六回の内容で名誉館長が、わかりやすく解説しています。

第一回　五月二八日（金）
日高見国と日の本の国
―東国エミシの国とみちのくエビスの国―

第二回　六月二五日（金）
東北「南」と「北」
―「阿武隈の国」と「北上の国」―

第三回　七月二三日（金）
伊佐須美・都々古別お成り道
―鬼怒川ルートと久慈川ルート―

第四回　八月二七日（金）
前途三千里
―白河末知の奥への門―

第五回　九月二四日（金）
八十里越挽歌
―河井継之助イフ史論―

第六回　十月二二日（金）
亜欧堂のこころに学ぶ
―東洋道徳・西洋芸術―

恐竜時代のアリ化石、公開中！

ハリアリの化石〔白亜紀後期〕鈴木千里氏 標本　高橋紀信氏 撮影

昨年一〇月に新聞やテレビ等で話題になりましたコハク中のアリを、常設展自然部門展示室「県土の形成」にて、展示しています。これは、いわき市自然史研究会代表の鈴木千里さんが、いわき市大久町小久の地層「玉山層」（中生代白亜紀・八五〇〇万年前）から発見したもので、国内最古のアリの化石です。このアリは、ハリアリ亜科の一種で、体長5㎜の雄アリです。アリは約一億四〇〇〇万年前に、ハチから分化しました。中生代白亜紀のアリ化石の産出は、北アメリカやロシアで知られていましたが、日本では初めてで、進化の過程が解明される貴重な発見です。

鈴木さんのご厚意により、本館に寄託され、一般公開されることになりました。ぜひ、見においでください。

研究ノート

古代籍帳に見られる「刀自」名について

竹内　浩　歴史担当

はじめに

平成五年にいわき市荒田目条里遺跡から「里刀自」宛て郡符木簡が出土した。「刀自」とは「へ（ト）ヌシ」から転訛したもので戸内の女性リーダーを指す。そのような一般的な呼称を担いながら一方では個人名として用いられ、当時の女性呼称を知る上で興味深い。拙稿では実際の古代籍帳をもとに個人名としての「刀自」を考えてみる。

Ⅰ大宝二年籍の考察

大宝二年に作られた美濃国と西海道諸国の戸籍は現存する最古のものである。まず比較的残存数が多い美濃国戸籍を中心にみていく。ここでは「刀自」を含む名が七九名で、その内訳は、「刀自売」五四名、「小刀自売」二二名、「麻刀自売」二名、「大刀自売」一名となる。

圧倒的多数を占めるのが「刀自売」で、その他の者も「刀自売」と姉妹関係、殊に妹を指すことが多い。すなわち「刀自」名を持つ二五人のうち、婚姻、あるいは高齢期の死亡等を考慮し一〇代以下の一四名について検討すると、まず「刀自売」を姉に持つ者は「小刀自売」六名、「麻刀自売」二名である。中でも「麻刀自売」一名は「刀自売」「小刀自売」の妹として附籍され、順序としては「小刀自売」の次の妹の名として付けられている。

次に残り六名のうち、「小刀自売」五名、うち三名は三女ないし四女で、「刀自」名ではないが姉が存在する。「小さな女の子」という程度の意味で、付けられたとも考えられる。残りの二名は、姉が存在しないが、その家族を見てみると、両者とも父ないし母のみと編籍されている。最後に「大刀自売」であるが、天皇の「夫人」を「オホトジ」と訓じることがあるとおり、古代の女性名上特別な意味を持ち得るような呼称である。

以上のように「刀自」という名は大多数が「刀自売」の妹にあたるか、少なくとも姉を持つ次女以下で、かつ「刀自売」「小刀自売」「麻刀自売」という順番で名付けられていたことが分かる。

それでは「刀自売」自体は姉妹の筆頭に立つ存在なのだろうか。もしそうであるならば、戸籍表示が「次」にならないはずである。そこで親族呼称によって、「刀自売」を分類してみると、「妻（妾）」が九名、「母」が四名、「妹」が六名、「寄人」一名、「婢」が三名、「児」が二二名、そして「次」が九名である。その内欠損により把握できない一名を除き、全ては次女以下の女子で比較的年齢の若いものである。さらに二名は妹に「小刀自」を同籍させている。つまり、先述したとおり「刀自」「小刀自」という関係性はありながらも、その姉妹内の位置づけは必ずしも長女と次女の関係にあるとは限らず、長女に「～売」、そして「刀自売」「小刀自売」という順番を取る場合も見られるのである。

ところで、「児」とされる二二名のうち一一名は両親とともに附籍されているが、残りの一一名は父母どちらかのみである。これは「刀自売」のいない「小刀自売」父子（母子）とも対応するかにみえ、国家政策と実態家族との関係で議論のあるところである。

さて、このような「～売」「刀自売」「小刀自売」「麻刀自売」という女子名を付ける習慣は同年作成の西海道戸籍にも見られるのだろうか。本戸籍では「刀自売」（八名）「小刀自売」（一名）合わせて僅かに九名しか見られない。うち「刀自売」は八名で、三名は「妻」ないし「妾」である。さらに残りの五名は長女ではないが、次女以下、一〇歳より下の若年者である。ただ戸主未詳の「刀自売」のみ二二歳である。しかし「刀良売」一六歳を妹に持つ長女で、先程の美濃国で得られた結果を排除しない。

Ⅱ養老五年籍について

下総国の戸籍で「郷里制」「房戸制」導入後初の戸籍である。大宝二年籍より約二〇年後のものである。「刀自」四五名、うち「刀自売」「小刀自売」の姉妹関係を持つ者は、僅かに二組である。ところが「小刀自売」「麻刀自売」姉妹一組、逆に「麻刀自売」「小刀自売」の順で命名された姉妹二組、両者とも妹がおり、一組は「若刀自売」を、もう一方は「広刀自売」を擁す。他にも姉「刀自売」、妹「徳刀自売」という姉妹も一組存在し、今まで見られなかった「刀自」名の多様化が見られる。

以上美濃で得られた「～売」「刀自売」「小刀自売」「麻刀自売」という姉妹への命名順のうち、「刀自売」「小刀自売」の傾向は見られるが、「小刀自売」「麻刀自売」の部分では順序が逆転し、「徳刀自売」「広刀自売」という名も現れる。試みに「刀自」を含む全ての名を数え上げてみると、「刀自売」一一名、「小刀自売」一五名、「広刀自売」七名、「麻刀自売」五名、「徳刀自売」三名、「若刀自売」「嶋刀自売」「足刀自売」「宮刀自売」各一名となる。まず注目されるのが「刀自」と「小刀自」の数の逆転である。今までの結果から考えると、姉が「刀自」でそれに応じて妹に「小」が付けられるという関係にあったのだから、当然「刀自」の方が多くなければならない。しかし、「小刀自」が「刀自」を上回る。また、新出「広刀自売」が七名と多くを占め、しかも彼女たちの年齢は全てが一〇歳未満である。逆に最も高齢な七〇代女性は「刀自売」であり、五〇代、六〇代の四人も「刀自」「小刀自」各二名ずつで、大宝二年籍と同様の傾向が見られる。

このような様々な「刀自」が出現する本戸籍に、「家主売」三名、「宅売」一名の四名が見られるが、「イヘ」「ヤカ」を含む人名は、大きな時代変化を予想させるものであるという考えがある。以下それについて簡略に記す。

Ⅲその後の計帳歴名に見られる「家」「宅」名女子について

「近江国志何郡計帳手実」は、神亀元年より、一郷戸の「手実」を一〇年分、一纏めにしたものであるが、その天平元年の手実の中で三上部阿閑の長女として「家刀自売、年八」という人物が、「大友但波史族吉備麻呂」戸に附されている。また「山背国愛宕郡出雲郷計帳」から、神亀三年作成のものに「宅主売」三名、「宅売」「家主売」ともに二名、「宅成売」「大家売」「家虫売」それぞれ一名、天平五年のものに「宅売」二名、「小宅豊売」「家主売」「家売」「小家売」「宅主売」各一名が見られ、特に「家売」「小家売」「宅主売」の姉妹が注目される。というのも「家」を「刀自」に入れ替えれば美濃国などに見られた「刀自」「小刀自」の順序を襲うようにみえるためである。

おわりに

七世紀中期前後（美濃での最高齢「刀自」は六九歳）頃には既に、女性の個人名として用いられ、徐々に個性的な「刀自」たちが登場する。七世紀後半以降（下総での「家主売」が三九歳、山背の「家虫売」が五四歳で、六七〇年前後に生まれたと推定できる）「家」や「宅」を使った名がみられはじめ、社会や家族の構造に変化の兆しが見られる。そして九世紀半ばには木簡に記された公称としての「里刀自」が登場する。公称と個人名、「刀自」と「家」「宅」への変化など、これらが何を意味するものなのか。検討の余地が残されていよう。

《史料》
『寧楽遺文』上
『大日本古文書』一・二
『千葉県の歴史』資料編古代
財団法人いわき市教育文化事業団『いわき市埋蔵文化財調査報告書第七五冊』二〇〇一年

展示環境について

Q&A

回答者
保存担当
松田隆嗣

Q：展示ケースの端に置いてある機械はなにですか。

A：温度と湿度を自動的に測定し記録する装置で温湿度記録計あるいは自記温湿度計とも呼ばれています。

この装置を用いてケース内の温度と湿度を確認しています。温湿度記録計が入っているケースは一般にはウオールケースと呼ばれるものでケースの扉を閉めるときわめて高い気密状態になることから密閉型ケース（エアタイトケース）とも呼ばれるケースです。展示している資料には、温度や湿度が少し変化（特に湿度の変化した場合が主ですが）しただけで収縮や変形を起こしてしまう恐れのある資料が数多くあります。多くの場合、適切な環境条件、主に湿度を適切な状態に戻せば元の状態に戻るものがほとんどです。しかし、収縮や元に戻るといったことを何度も繰り返すことは資料にとって決して良いこととは言えません。また、資料によっては一度変形あるいは収縮してしまうと元に戻らなくなってしまう資料もあります。

このため、外部の温度や湿度が急に変化したとしても内部の湿度が急激に変化しないようにこのような密閉型の展示ケースを用いて展示しているのです。また、ケースの下部には調湿剤という薬剤を入れて急激な湿度変化が生じないようにもしています。

この調湿剤という薬剤はあまりなじみのないものと思いますので少し説明を加えますと次のようなものです。密閉型展示ケースのように外部からの空気の流入がない場合、ケース内の温度が上昇するとケース内の湿度（相対湿度）は温度とは逆に低くなってゆき、いわゆる乾燥した状態となってゆきます。しかし、調湿剤を入れておくことによりケース内に湿度の低下が生じるとこの調湿剤が水分を放出しケース内が乾燥状態となることを防ぎます。逆に温度が低下しケース内の湿度が高くなった場合は、調湿剤がケース内の水分を吸収し湿度を下げるように働き、ケース内を資料の保管に適した湿度に保つようにする薬剤です。

しかし、このような調湿剤の作用にも限度があります。あまり温度や湿度の変化が著しい場合には調湿剤も効かないことがあります。このため、温湿度変化に敏感な資料は密閉型ケースに入れて展示すると共にケース内に温湿度記録計を設置し急激な温度や湿度の変化が生じた時に速やかに対処できるようにしているのです。

このような調湿剤を用いてケース内の湿度が変化を生じないようにすると共に温湿度記録計によりケース内の温度と湿度変化を確認し調湿剤で調湿できないほどの湿度変化が生じた場合すぐに対応するために温湿度記録計をケースに設置しているのです。

展示ケース（密閉型ケース）に設置された温湿度記録計

ケースの下部に入れている調湿剤

同上温湿度記録計

トピックス

総合講座のご案内

県博の総合講座は、自然・考古・民俗・歴史・美術など個別分野を超えた共通のテーマを設定し、各分野の学芸員が協同で準備して開催するというスタイルの講座です。平成一四年度のテーマは「磐梯山を語る」、平成一五年度は「若松城を歩く」でした。

昨年度の「若松城を歩く」は、通年で全八回実施しました。「鶴ヶ城探検」（五月・九月）「鶴ヶ城の野の花」（七月）「鶴ヶ城の野鳥」（一一月）などの野外講座は、それぞれテーマをもって城跡を歩きながら四季折々の風景も楽しみました。「鶴ヶ城のあるじたち」（六月）や「鶴ヶ城と稲荷信仰」（一月）について学び、若松城天守閣郷土博物館や発掘調査の行われた松平家墓所なども見学しました。また、夏休み期間中には親子を対象に「城絵図パズルに挑戦」という体験的な講座も行いました。

今年度は、引き続き会津の城をテーマに、会津本郷町にある国史跡向羽黒山城跡に関する講座を開催する予定です。全二回の連続講座で回数はやや少なめですが、充実した内容を目指していますので、どうぞご参加ください。

（歴史担当　高橋充）

一二月四日（土）「向羽黒山城の歴史と自然」
一時半～　場所：県博視聴覚室
一二月五日（日）「向羽黒山城を歩く」（野外）
十時半～　場所：史跡向羽黒山城跡

※事前に参加申込をお願いします。
申込は実施日の一ヶ月前から受け付けます。

昨年度の鶴ヶ城での野外講座

向羽黒山城跡

◎冬の収蔵資料展予告

衣と暮らし
―東北の仕事着コレクション―

衣服は、気候や生業などその土地の風土を表しています。福島県は、会津・中通り・浜通りと風土も違い、それぞれの特色ある服装文化が育まれてきました。県内の仕事着を中心に、東北地方の仕事着も展示し、衣と暮らしを通して東北の風土を紹介します。

主な展示資料は、南会津のサシコ・浜通りのマイワイ（万祝）をはじめ、庄内（山形県）や秋田のサシコ、津軽（青森県）のコギンなど、収蔵資料を展示します。

南郷のサシコ　館蔵

■冬の収蔵資料展《衣と暮らし―東北の仕事着コレクション―》は平成一七年一月一五日（土）から三月二一日（月・祝）まで
■常設展観覧料でご覧いただけます。

常設展示室「歴史・美術」テーマ展示

「真心を伝える―手紙の歴史」
会期　八月三一日(火)から
　一〇月一一日(月・祝)まで
「蒲生氏郷と保科正之―会津藩政の幕開け」
会期　一〇月一九日(火)から
　一月一〇日(月・祝)まで

講演・講座

※は要申込

◎歴史講座
「古文書入門7　中世①」(実技)
講師　当館学芸員　高橋　充
日時　一〇月九日(土)午後一時半～三時
「古文書入門8　中世②」(実技)
講師　当館学芸員　高橋　充
日時　一一月一三日(土)午後一時半～三時
「古文書入門9　古代①」(実技)
講師　当館学芸員　竹内　浩
日時　一二月一一日(土)午後一時半～三時

◎民俗講座
「只見の民俗―技術を語る人」(上映・解説会)
講師　当館学芸員　榎　陽介
日時　一〇月一一日(月・祝)午後一時半～三時

◎特別講座「風土の文化誌」
「亜欧堂のこころに学ぶ―東洋道徳　西洋芸術」
講師　当館名誉館長　高橋富雄
日時　一〇月二三日(金)午後一時半～二時半

◎体験講座
※「カラムシの糸づくり」(実技)
講師　染織工芸家　日置　睦さん
　佐藤美幸さん
日時　一〇月二三日(土)午後一時半～四時
※「編組細工をやってみよう」(実技)
講師　三島町生活工芸運動友の会のみなさん
日時　一〇月二四日(日)午後一時半～三時
※「竹とんぼをつくろう」(実技)
講師　技術伝承者　阿部吉致さん
日時　一〇月三〇日(土)午後一時半～三時
※「ふくしまの手技に親しむ　型染め1」(実技)
講師　喜多方染織グループれんが代表
　冠木昭子さん
日時　一〇月三一日(日)午後一時半～三時
※「ふくしまの手技に親しむ　型染め2」(実技)
講師　喜多方染織グループれんが代表
　冠木昭子さん
日時　一一月六日(土)午後一時半～三時
※「うるしの技に挑戦―沈金」(実技)
講師　沈金一級技能士　白岩　守さん
　白岩準市さん
日時　一一月二一日(日)午後一時半～三時
※「わらぞうりをつくろう」(実技)
講師　技術伝承者　鈴木幸雄さん
日時　一一月二七日(土)午前一〇時～三時
※「竹のかごをつくろう」(実技)
講師　人見守彦さん
日時　一一月二八日(日)午後一時半～三時
※「おもちゃをつくろう」(実技)
講師　当館展示解説員
日時　一二月一八日(土)午後一時半～三時

◎企画展展示解説会
「ふくしまの工芸」
講師　当館学芸員　小林めぐみ
日時　一〇月二三日(土)午後一時半～三時
　一一月二三日(火・祝)講演会終了後
　一二月五日(日)午後一時半～三時

◎七絃琴演奏会
「江戸の音色・唐土の音色」
奏者　飛田立史さん
日時　一一月三日(水・祝)午後二時～三時半

◎博物館友の会講演会
「工芸の歴史と文化」
講師　京都工芸繊維大学助教授
　樋田豊次郎さん
日時　一一月三日(火・祝)午後一時半～三時

◎考古学講座
※「博物館を探検しよう」(見学会)
講師　当館学芸員　田中　敏
日時　一一月二〇日(土)午後一時半～三時

◎総合講座
※「向羽黒山城の歴史と自然」
講師　当館学芸員
日時　一二月四日(土)午後一時半～三時半
※「向羽黒山城を歩く」(野外)
講師　当館学芸員他
日時　一二月五日(日)午前一〇時半～正午

木曜の広場

講師　館長　赤坂　憲雄
　学芸員　佐々木長生
場所　講堂　入場無料

会津学事始め―四季の生業と暮らし
◎第七回
「神去来」
日時　一〇月七日(木)午後一時半～三時
◎第八回
「サケとマス」
日時　一一月一八日(木)午後一時半～三時
◎第九回
「正月と小正月」
日時　一二月二日(木)午後一時半～三時

実演

◎「昔語り」
語り部　山田登志美さん
日時　一〇月一〇日(日)午後一時半～三時
語り部　横山幸子さん
日時　一一月二三日(火・祝)
　午前一〇時半～正午
◎「会津の唐人凧つくり」
技術伝承者　鈴木英夫さん
日時　一一月七日(日)午後一時半～三時
◎「機織り」
染織工芸家　山根正平さん
日時　一一月一四日(日)午後一時半～三時
◎「注連飾りつくり」
技術伝承者　榊原源隆さん
日時　一二月二三日(木・祝)午後一時半～三時
◎伝統技術実演
「三島の編組細工」
講師　三島町生活工芸運動友の会のみなさん
日時　一〇月二四日(日)午前一〇時半～正午

やさしい展示解説会

＊展示解説員による常設展の案内です。
＊毎週土曜日午後二時から(三〇分間)
　毎週日曜日午前一一時から(三〇分間)と午後二時から(六〇分間)です。
＊なお、都合により開催しないこともありますので、ご了承下さい。
＊その他、行事等の詳細に関しましては、月行事予定表やホームページをご覧ください。

常設展無料開放日

一一月三日(水　文化の日)

一〇～一二月の休館日

一〇月　四日(月)・六日(水)・一二日(火)・一八日(月)・二五日(月)
一一月　一日(月)・四日(木)・八日(月)・一五日(月)・二二日(月)・二四日(水)・二九日(月)
一二月　六日(月)・一三日(月)・二〇日(月)・二四日(金)
年末年始　一二月二七日(月)～一月四日(火)

＊小・中学生、高校生は常設展を無料でご覧いただけます。
＊小・中学生、高校生は一一月二日(火)～七日(日)のふくしま教育週間に限り、企画展を無料でご覧いただけます。

季刊博物館だより　第74号　2004年9月10日発行　編集・発行　福島県立博物館　〒965-0807 会津若松市城東町1―25　TEL 0242-28-6000　印刷　株式会社アポロ　会津若松市七日町14―7　TEL 0242-22-5139